

闘志メシメシ



～陸上男子200m 日本歴代3位記録を出した 飯塚翔太選手～

中央大学陸上競技部の飯塚翔太選手(法学部4年)が5月3日の静岡陸上・男子200mで20秒21の日本歴代3位を出した。昨夏ロンドン五輪決勝なら7位に入る好記録だ。6月9日の日本選手権(東京・調布/味の素スタジアム)では同種目に20秒31で初優勝し、世界選手権(8月・モスクワ)の出場権を得た。「世界」と勝負するときがきた。

「気持ちいい」。地元静岡で行われたレース後のインタビューでも、晴れ晴れとした顔だった。心底からの思いがストレートな表現になる。

コーナーを抜けて直線に入るとストライドがさらに伸びて行く。一步一步がテンポよく、他を寄せ付けない力強い走りだ。自己ベストを0秒24上回った。会心のレース展開に「殻を破れたかな」と自信を深めた瞬間でもあった。

静岡・藤枝明誠高出身。スタンドには友人・知人らが詰め掛けていた。「みなさんに見てもらえてよかったです」

悔しい思いをしていた。100mで10秒01の日本歴代2位記録を持つ17歳の高校生、桐生祥秀選手(京都・洛南高)が忘れられない。同じ織田記念陸上(4月29日、広島)で走り、学生ランナーは10秒25の自己ベストを出しながら脇に置かれた。「高校生にはポロ負けしていますから」

日本選手権では勝負強さを印象づけた。自身は世界陸上への出場条件をタイムで満たしている。日本陸連が独自に定めた「派遣記録」—世界陸上決勝に出場できるタイムや記録—男子200mは20秒29。国際陸連設定



テレビ取材を受ける飯塚選手、最近は取材が増えている



世界選手権メンバー入りを決めた走り(写真提供=中大スポーツ新聞部)

のA標準記録20秒52より厳しい。静岡での20秒21は文句なしの世界切符獲得だ。

日本選手権決勝では完走すれば出場権を得られる。「足元をすくわれないよう、しっかり準備しました」。気合いの入ったレースは、5位までがA標準突破の高レベル、それをぶっちぎりで制した。「本物です」と声高に解説したのは、NHKテレビ解説の山崎一彦日本陸連強化副委員長だ。

五輪学習

五輪初出場のロンドン大会では、「貴重な経験」をバッグにいっぱい詰めて帰ってきた。「大事なものは技術よりパワーだと感じ、シーズンオフには週の

半分、筋力トレーニングをしていました」

五輪男子400mリレーで、アンカー勝負した世界チャンピオン、ウサイン・ボルト(ジャマイカ)のように速く走るにはパワーが必要だ。

精神面でも学んだ。「僕は緊張しまくったほうがいい。冷静に冷静にと走ったこともあります。振り返ると世界ジュニアでも緊張していた。熱くなつてアドレナリンを出し尽くします」

目を見開き、血液がどくどく流れ、心臓がフル活動。鍛えた185cm、77kgの体のすべての部位が躍動し、青春の汗が飛び散るときだ。2010年7月、世界ジュニア200mをアジア人として初制覇。曲折を経てレース直前の心構えが分かってきた。

競技場を後にすると好青年に戻

る。東京都が推進する「2020年東京オリンピック・パラリンピック招致における連携協定締結式」(都庁)にアスリート代表の一人として招かれた。

中大主催の「陸上教室」では子どもたちにスタート練習を分かりやすく教え、学生の対校選手権大会(関東インカレ)でレースに出ないときは部員と一緒にスタンドに陣取り、肩を組んで声援する。

学生最後のハイライト、世界陸上は「静岡と同じタイムの20秒21で走るのが目標です」と会心レースの再現を狙う。「夢」との表現で終わっていた19秒台も現実味を帯びてくる。

高校時代の恩師、佐藤常保さん(静岡陸上競技協会評議員、中部陸上競技協会副会長)が静かに話す。

「性格もいいし、着実に伸びている。世界の舞台、200m決勝に黄色人種が一人入ってもおかしくはない」

アフリカ系黒人選手が決勝のレーンに並ぶなか、中大を超えて日本やアジアを超えて、期待を込めて教え子を黄色人種と表現する。

世界陸上モスクワ大会・男子200m決勝は8月17日(土曜)スタート。世界記録保持者のボルト(19秒19)に真っ向勝負する。



■男子200m・日本歴代3人

①	20:03	末続慎吾(ミズノ)	2003年 6月7日
②	20:16	伊東浩司(富士通)	1998年10月2日
③	20:21	飯塚翔太(中大)	2013年 5月3日